

伏見さんとデモクラシー

鎮目恭夫

伏見さんに関する随筆を頼まれ、いろいろ思案しているうちに、ふとデモクリトスの名が頭に浮んできた。デモクリトスは古代ギリシャの原子論の創始者だが、原子論は以来今日の物理学の量子論に至るまで、ずいぶん曲折を重ね

た。今日の量子論は、古代ギリシャの自然哲学に照すと、デモクリトスの原子論と、それより約百年前のピタゴラス教団の音楽的宇宙像（万物は数（有理数）とその調和からなるという説）とを組み合わせたような性質のものだ。

その「デモクリトス」と発音と文字が似ている「デモクラシー」のほうは、今や、原子物理学が十九世紀末葉から二十世紀前葉へかけてぶつかったのと匹敵するほどの厄介な状況に、ますます陥ってきた。

こんな見方をするなら、戦後四十年間にわたる伏見さんの政治的・社会的な言動や態度をかなり理解することができ、かつ伏見さんのユニークな存在を評価できるだろう。

戦後四十年間のわが国のデモクラシー（以下では民主主義と書く）の運動の中には、マルクス主義的民主主義と自由主義的民主主義（自由民主党や民主社会党の主義ではない）の二つに大別できる流れが絶えずあり、後者の流れに属する人のなかには反共反ソ的な人がかなり多かった。伏見さんはこの四十年間終始、世界観と発想法と活動様式においてマルクス主義者とは明らかに異質な人だったが、反共反ソの立場はとらず、また、自民党傘下の国家権力に調子を合わせる部類の人でもなかった。そのため、マルクス主義的な科学者たちにとってはしばしば利用価値があり、伏見さんの方も、そうと知りながら利用されることを拒ま

ない傾向があった。

この伏見さんの政治的・社会的活動の特徴は、民主主義的な手続きや作法をあまり尊重せず、そういう手続きや作法の枠を超えて、自分独自の思考と判断によって独断専行的な行動をする傾向と、権力の専横やずるさと戦うことの難しさを充分考慮にいれずに自己の見解をバカ正直に公言する癖とである。この二つの点では、やはり明らかに非マルクス主義者だが反共家ではなかった故朝永さんは、伏見さんとは著しく対照的だった。

このような伏見さんの政治的行動と発言の例をいくつかあげよう。一つは、朝鮮動乱の最中でサンフランシスコ講和条約の後の一九五二年十月に日本学術会議総会に出した茅・伏見提案だった。ここではその内容は解説しないが、当時伏見さんは民主主義科学者協会（略称「民科」）の推薦を受けた学術会議会員であり、一九五一年以来民科（当時の会長は末川博）の副会長でもあった。当時民科と学術会議の民科系会員はその提案の提出に反対したが、伏見さんはそれを説得するに十分な努力を払わず独断専行した。

その後、民科は一九五六年に本部を解散し、伏見さんは一九五七年から六八年まで学術会議会員にはならなかったが、その間の一九六七年五月に伏見さんは、故高橋秀俊さんと二人で、文部省学術奨励審議会の科学研究費分科会委員としての権限によって、素粒子論湯川班（湯川さんを班

長とする二百余名の総合研究班）の要求予算二百万円をばっさり削ってしまった。当時の朝日新聞に「（予算配分を）民主的にやると、いろいろな意見が無限にでてきて結論がない。どこかで英断を下さざるをえない」という伏見談話ののった。当時は新聞などで、米軍から日本の大学等への研究費の流入が過去十年間で四億円に達したとか、同年度の宇宙開発予算が東大宇宙研と科学技術庁の分を合わせ五十億円だとかが話題になっていた時期だった。

その後伏見さんは学術会議会員に再び咲いたが、一九七四年二月に学術会議副会長だった時、米国学術振興協会（AAS）総会へ出席予定のところ、出席できなかったため代りに送った論文で「日本学術会議の会員は、第一級の科学者というより、政治色の強い人物とみられている。……学術会議は、反政府的性格のため保守政権から嫌われ半殺しの状態にある。さもなかったらもっと大きくなっていただろう」と述べたという（朝日新聞四月二六日）。

だが、伏見さんはやがて一九七八年一月に学術会議の会長に選ばれ、八一年一月に再選された。すると同年五月に鈴木内閣が中山総理府総務長官を中心に日本学術会議の根本的骨抜きの方針を打出した。これに対し伏見会長は、学術会議の会員選挙制を守ることを中心目的に、マルクス主義系の会員科学者たちと自民党政府との間に立って奮闘したが、独断専行的な行動や不用意な発言などのため前者か

らの十分な支持も得られず、政府からは科学者なんか札束でひっぱたけよという調子で輕蔑され、遂に刀折れ矢尽きて翌一九八二年に会長を辞任した。やがて結局、日本學術會議の會員選舉制の廢止を柱とする法案が、一九八三年十一月に衆院文教委で自民党の単独審議で可決された。

伏見さんはその年の六月の参議院比例代表制選舉第一回に公明党推薦候補として参議院議員になった。その選舉では、私は公明党の機関誌などに伏見推薦文を書いたが、月刊『公明』には茅誠司さんの伏見推薦文のついていた。その二つは、伏見さんがウソやハッタリのない正直な人物だという指摘で共通していた。政治の兵法ではウソやハッタリもしばしば必要だが、広い長い眼でみるとウソもハッタリもない発言はなかなか大切だ。その点から、参議院議員としての伏見さんの今後の行動に対し、今までの事例を二つあげて助言する。

一つは一九八三年九月の大韓航空機事件について。あのとき衆参両院は全与野党一致で早速ソ連政府に謝罪と賠償を要求する決議をした。だがあの事件は、ソ連軍当局の大へまで、主な原因は大韓航空のミスと、それを知りながら放置しておいた日米の軍当局にあったらしいことが、普通の日刊紙をみているだけで数日のうちに明白になった事件だ。だから、公社共は、謝罪と賠償の要求をするなら、ソ連よりは大韓航空会社と米日両国政府に対してなすべきだ

った（このことは拙著『ウィーナー』（岩波20世紀思想家文庫、同年十一月刊）の末尾に書いた）。

もう一つは今年（一九八六年）九月の中曾根首相の人種差別・女性差別失言問題。あれに対し公社共は首相と政府に発言の取消しを要求したが、あれは中曾根首相らのホンの正直な吐露なのだから、発言の取消しではなく発言の「確認」をこそ要求すべきだった。そんな首相下の自民党議員に投票した人々は、国内及び外国の他の人々に対して謝罪をせねばならない。

右の二点は、自分自身の優れた思考力によって独断専行しうる能力をもった伏見さんなら、当然そう考えそう発言し得たはずだ。そんなことをしたら公明党に損害が及んだとは思わない。私は公明党をそんな党とみないから伏見さんを推薦したのである。

（科学評論家）